

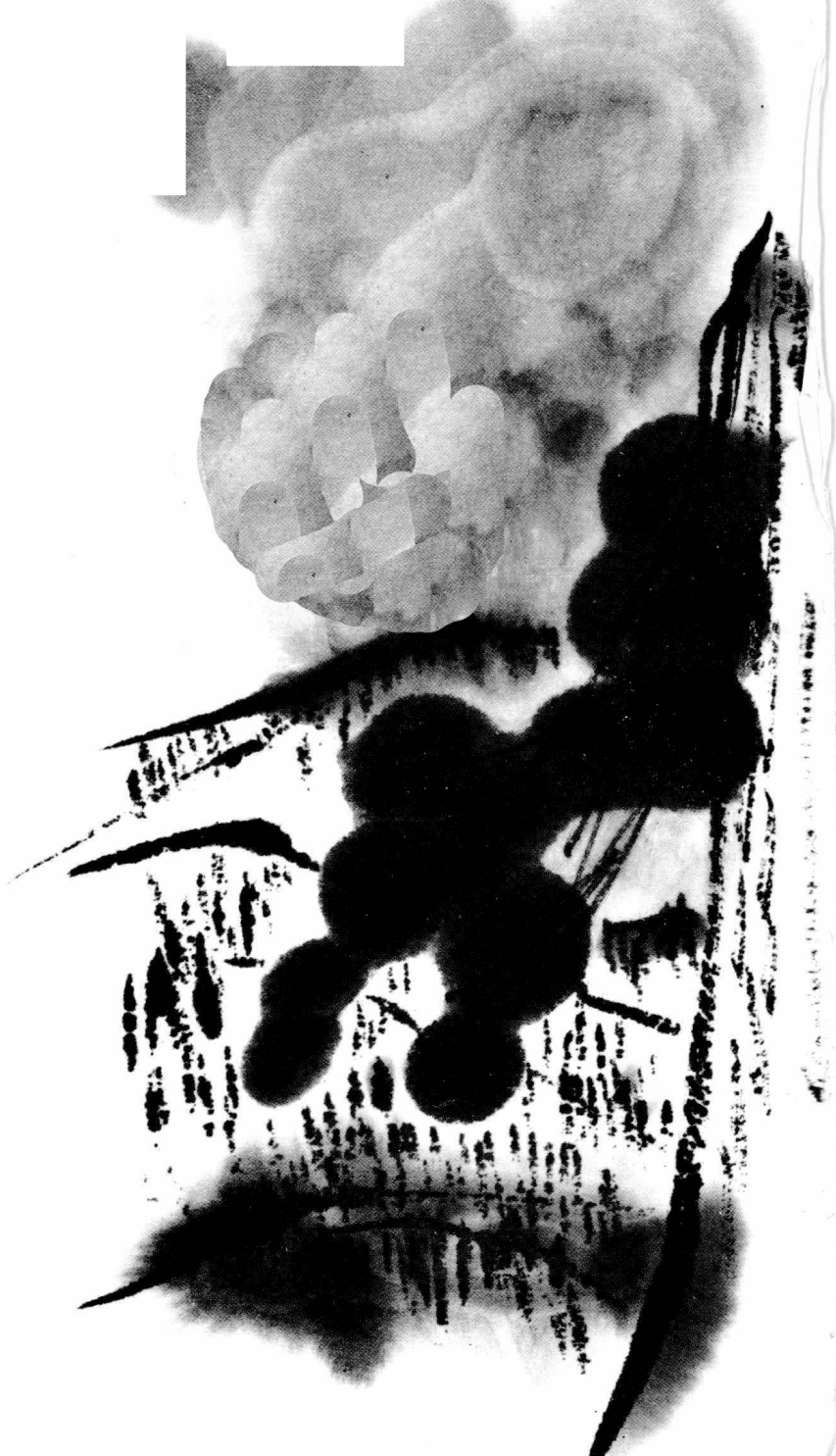
川口志保子

三太の杉



太たの杉す

川口志保子





少年少女／創作文学

三 太 の 杉

N. D. C. 913 偕成社 226p. 21cm 1972年

発行 昭和47年 3

著 者 ©川 ^{かわ} ^{ぐち}口 ^し志 ^お保 ^こ子

発行者 今 村 広

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町 3 の 5

TEL (03) 260—3221 (代) 〒162

振替 東京1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

乱丁本・落丁本はおとりかえいたします。

8393-719120-0904

検印省略

はしがき

杉山すぎやまのなかを、三太はかけてゆく。

杉山のなかで、三太はうたう。

杉にかこまれて、三太ははたらく。

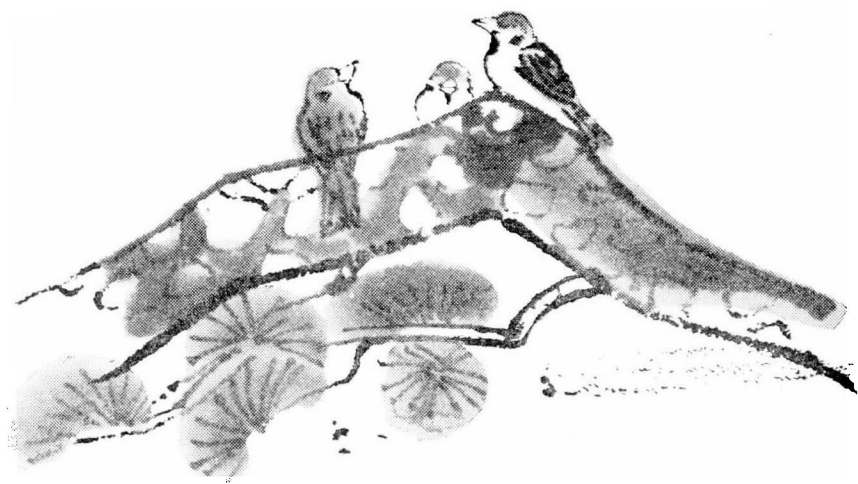
杉をあおいで、三太は考える。

あなたがたも、考えてほしい。

三太のいのちを。

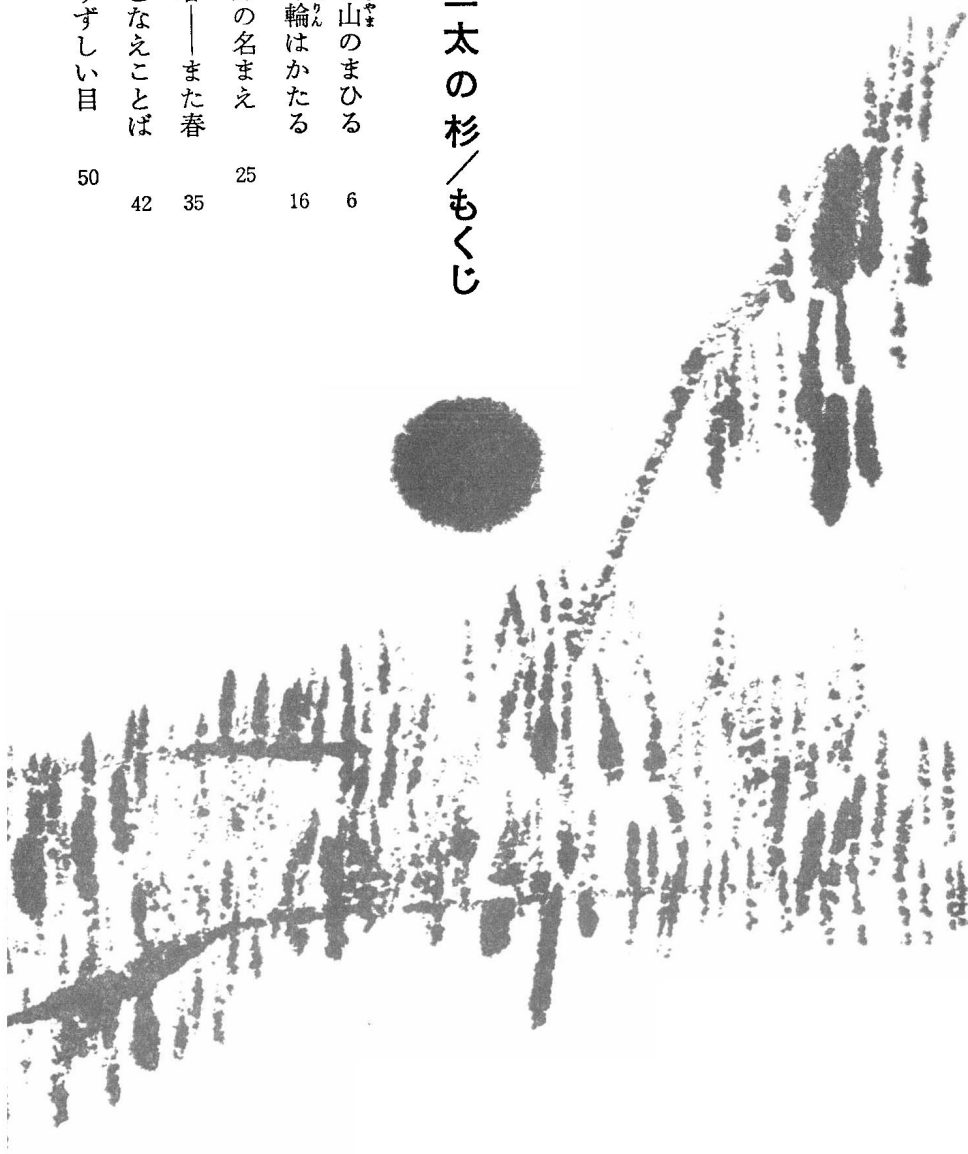
空をめざしてのびてゆく杉を。

そして、いっしょに杉山のこだまを聞こう。



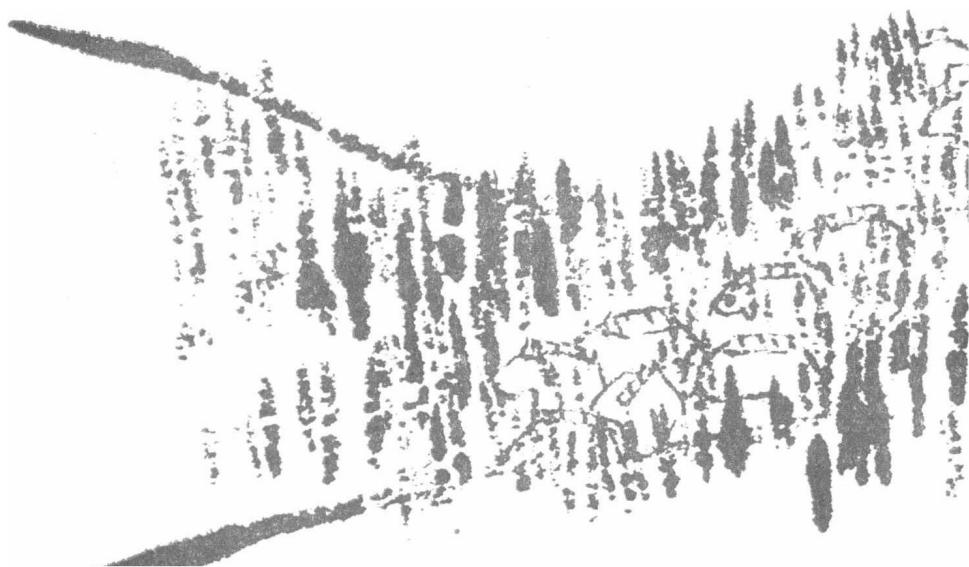
三太の杉／もくじ

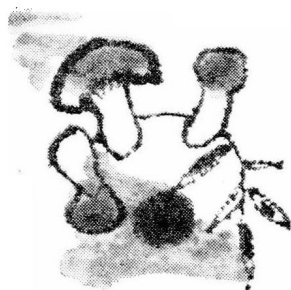
すずしい目	50
となえことば	42
春——また春	35
妹の名まえ	25
年輪はかたる	16
杉山のまひる	6



ぬすみぎき	61
杉でっぼう	73
じんべえつばきの実 ^み	82
象 ^{ぞう} にきいてみる	91
母の声、母のことは	101
琴爪 ^{ことづめ} のはこ	109
はたる合戦 ^{がっせん}	124
杉は生きている	132
夏山の父と子	142
おらは杉山三太	155
山の神さま	171
夜の山火事	183
木馬 ^{きうま} ひき	194
三太 ^{さんた} 杉 ^{すぎ}	207

この作品と著者について、藤田圭雄





作者・川口志保子

岡山に生まれる。奈良女子大学国文学部卒。歌誌「おだまき」同人。歌集「螺旋階段」「冬の壺」がある。モービル児童文学賞に「ロクの赤い馬」が入選以来児童文学に入る。作品「十日間のお客」「杉は生きている」「あじさいの花」など。神戸児童文学あすの会同人。日本童話会会員。現住所／兵庫県姫路市柿山伏中ノ町81

画家・斎藤 博之

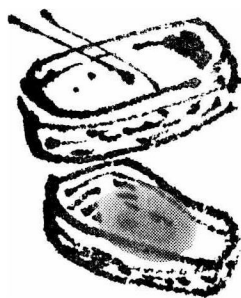
1919年、中国瀋陽に生まれる。帝国美術学校洋画科卒。毎年、銀座・日本橋等で個展を開いている。「教室 205 号」「二つの川」「ちゃんめら子平次」など多くの挿絵の仕事のほか、「しらぬい」(第2回講談社出版文化賞絵本部門賞受賞作)「がわっぱ」など絵本の作品も多い。現住所／東京都国分寺市南町2-11-15

三^{さん}
太^た
の
杉^{すぎ}

川口志保子



杉山すぎやまのまひる



耳をすますと、ずうっと足もとの山すそで、流れながの音がするばかり。山の中はしんとしずかだ。山と山が、かきなりあい、たたみあって、北へなだれて高まっていた。その山という山、いちめんにすくすくとみごとにのびた杉すぎの木だった。その山の斜面しやめんにひとところ、ぐるりと杉すぎの木はえていない——はげたように見えるひろい部分ぶぶんがあった。そこに、ひとりの男がうごいていた。「おおい、三太さんた。」

男はふとい声でむすこを呼んだ。

その声は、杉山すぎやまの斜面しやめんをわあんとひろがり、それが消えていったころ、また、「おおい、三太さんた。」

と、とおくからこだまがかえってきた。そう、いまの声のこだまだ。むこうの山の斜面しやめんにぶつかってかえってきたひびきは、なんだか山の神さまの、小さい三太をしかりつける声のようにきこえた。

「おおい三太……おおい、三ノ太。」

山の斜面にはあかるい陽がさしていた。足もとには杉の葉が茶色にくちてうずたかくつもっていた。杉の葉はこんなにくちても、まだいいにおいをたもっていた。

「おお……い、三ノ太……あ。」

「はあいよう……お父ウよう。」

こんどは返事があった。父親のずっと右手の、おもいがけぬ高さのところから、おさない男の子の、高い声がキーンと降ってきた。

「おりて、こーいよう……昼だぞ……。」

「ひ——る——だ——ぞ——」

ながく引いたこだまの、昼をしらせる声をきいて、杉の木の高いで、ひとり遊びをしていた三太はきゆうに顔をしかめた。いたい。胃ぶくろがきゆうんとしまるようだ。はらべこなのに気づくと、三太の胃ぶくろはきゆうに不平をいいたしたのだ。

「ちくしょう、こら、くそ、ちくしょう、こら、くそ。」

三太はそうとうけわしい山の斜面を、いちめんの大杉のあいだをぬって、足をするようにしてくだりはじめた。山の子らしく、腰をひくくかまえている。三太の小さいぞうりにふみくずされて、つもった杉の葉がぶうんといいいにおいを立てた。

「あ、た。」

石ころに足をとられて、三太はずりりとすべりかけたが、やっとふみとどまった。

「ちくしょう、こら、くそ。」

はらべこの胃ぶくろへの、ちくしょう、こら、くそは、こしやくな石ころへの、ちくしょう、こら、くそっにかわった。三太は、その石ころを右手ににぎりしめて、腰をさげると、投げるかまえをした。ひどくいいかつこうだった。

コーン コーン コーン コーン……

はるかな頭の上で、石ころのつぶてが、杉の幹にあたって気持ちのいい音をたてるのを、父親の平次はキセルを手にしたがら、ひとつ、ふたつとかぞえていた。父親の平次も、小さいころ、よくこれをしてあそんだ。じいさまの平造に、杉はお山の宝じや、その幹につぶてを投げたりしちゃあならんぞ、とよくしかられたけれどやめなかった。山の子の遊びは、かずすくなかったのだ。——いきおいよく杉の幹にあたった石ころは、カッと、こころよくひびいてはねかえると、つぎの幹にあたり、またそのいきおいでむこうの幹にぶちあたる。その音が、山のきれいな空気の中に、さえてひびいてくるのだった。

がさがさつと三太がすがたをあらわした。

「お父ウ、四つ、きこえたか？」

「おう、きこえたぞ、四つだ。」

お父ウは三太のとくいそうな顔を見て、にやりとわらった。

「きょう、はじめて四つつづいたんだ。」

まだ、春あさいというのに、三太は鼻のあたりにあせをかいていた。左のひじをあげると、三太はきもののそでごと、ぐいと引いて、そのあせをふいた。三太のめくらじまのもめんのきものそでは、たびたびそんなにしてこすられるあせやら、なみだやら、それから、たぶん鼻水やらで、てらてらにひかっていた。

茶のかわりに、谷川の水を竹のつづくんできて、親子は昼めしにかかった。

なにしろ、慶応四年（一八六八年）という年だ。ふたりの弁当箱は、こうりやなぎをあんできくった、小さいこうりの形をしたもので、めしがぎゅうっとおさえつけていれてあった。竹をけずったはしで、ふたりはたべた。はらべこだった三太は、はじめ三分の一ほどは、ものもいわずにかきこむようにたべた。玄米にまぜこんだあわが、きいろく、むちむちとうまかった。ほしだいこんが、しょうゆ色にしめてのっかっていた。ひじきが黒くまざっている。

うまい。これは、おばばがこさえてくれたんだっけ。そうだ、お母アは夜明けにや、や、こ（あかんぼう）をうんで、三太がおきたときは、まるで水にしずんだようにねむっていた。三太は、お母アの寝顔を、この日、はじめて見るような気がした。——そのそばに、赤い小さなや、や、こがいたっけ。それもしわくちやの顔をしてねむっていた。——三太は、お母アの出産でとりこんでいる家から、山仕事をするお父ウにつれられて、朝から、この杉山へきていたのだった。三太は、ふと、はしをやすめた。

「なあ、お父^とウ。」

「ん？」

平次は弁^{べん}当^{とう}箱^{ばこ}を口からはなした。

「ややこ、寝^ねてるやろか、いまごろ。」

「さあて、おきとるかもしれない。」

「なあ、ややこって、小^こまいもんやなあ。」

「おまえも、小^こんまかったぞ、さあて、七百^め匁^め（およそ二・六キロ）もあったかなあ。」

「ふうん。」

三太はほおをふくらませた。ひと口はおぼって、もぐもぐしながら、またいった。

「なあ、お父^とウ。」

「ん？」

「あのややこ、ほんまに、女やてか？」

「ああ、女やぞ。」

「男やったら、山へつれてきて、おれ、つぶて（小石）投げおしえてやるのになあ。割^{わり}竹^{だけ}で弓^{ゆみ}つくるのも、おしえてやるのになあ。」

「つぶて投げどころか、やがて木馬^{きうま}ひきをおしえるのになあ。」

平次はぶすりとそういったが、おもいなおしたように、やさしい声になってつづけた。

「女の子やから、お母アのええ手だすけができて、いまにお母アもたすかろうわいな。なんせ、おばの目が、かすみだしよるから、なあ。――ま、わしに三太、お母アには今度のや、やこと、それぞれ子分ができて、お母アはうれしかる。」

「子分！」

三太はいい気持ちになつて声をはりあげた。

「おれ、子分か、お父ウ！」

父親は、がっちりした肩をゆすつて、わらつた。

「そうよな、親子じゃもん、親分子分にちがいなかるうがな。」

「うふっ」三太は、はしゃいだ声をあげた。

「なあ、そいで、や、や、こは、どんな名アにするんや？」

「そりや、また、晩にでもきめようわい。」

三太はきゆうに平次のひざにもたれて、声をひそめていった。

「な、お父ウ、男の名ア、つけて見い、あのや、や、こ、男にかわるかもしれんぞ。」

「あほうじゃなあ、三太はいくつになつとらんじゃ、八つならもつと八つらしいことを考えいよ。」

「ふ、ふう」三太は首をちぢめてわらうと、竹づつの水をコクコクとのんだ。

親子がならんで腰をおろしている、この杉山の斜面は、ここいら一帯だけ木がはえていない。だから、いま、ちょうどふたりのま上にめぐつてきた三月の太陽の光は、この親子をやわらかい

ぬくもりでつつみこんでいるようだった。むかしの山も、尾根づたいの山も、いちめんにみごとな大杉でうずまっていた。そして平次と三太のいるあたりは、さしわたし七十センチもある大きな切りかぶが、いくつもいくつもうずくまっていた。ちかくの切りかぶに、平次はキセルや手ぬぐいなんぞをのつけていた。この斜面の杉だけが、ちかごろ切りだされたものらしい。

なおよく見ると、切りかぶのあいだにところどころ、若い杉の苗木が植えられている。ほりかえされた黒土のにおいがする。——朝から、いままで、平次がせつせと植えこんだ杉苗だ。三太は、規則たらしい杉苗の行列に気がついた。

「ありや、お父ウ、ようけ（たくさん）植えたんじやなあ！」

ほっそりした杉苗の列は、なんだか、まだこの斜面の土になじまぬように、一本一本がおずおずと風にふかれ、透明な山の空気のなかに、ほっそりと新入りの表情をみせていた。

「ああ、かわいらしい苗じやろ、ややこもかわいらしい、杉苗もかわいらしい。」

お父ウは、きざみたばこをちよっぴりキセルにつめて、火をつけると、だいじそうにぶうとふかした。

「あんなややこ、しわくちやのややこが、なんでかわいいもんか。」

三太はわざとにくまれ口をきいた。

「杉苗かて、ちよろんと立つとるだけや。」

「そのややこも杉苗も、いまに見てみい、大きくなってくれるわい。杉苗はなあ、もう、さらい



ねんになったら、三太よりもせいが高うなるぞ。それからさきは、ずいずいと根をはる、のびる……」

平次は斜面の光の中に顔をあげ、視線をあげた。まるで五年、十年と、杉のおいたちをえがいているようだった。

「杉のことは、もう、ええってば。なあ、ややこはどうなる？」

三太は、お父ウのひざをゆすった。

「ややこか？ ややこは、きまっとるわい。泣いて、ねむって、這うて、歩きだすわい。おまえも、おんなじことじやった。こんどは、女の子じゃから、ちっとは色が白うて、かわゆいかな。」

「ふうん、女の子じゃから——か。」

三太はしばらく考えていたが、おもいきってお父ウにきいてみた。

「琴、ひくか？」

「琴オ？」

お父ウはあつげにとられた。三太はきゆうにもじもじしていった。

「あのなあ、あのややこ、大きゆうなったら琴ひくか？ 庄屋さまのお千代さまみたいに。」

「琴なんぞ、わしらのような、まずしい山家の子どもが、なんでひくものか、あほらしい。——しかしなあ、なにかいな、三太は、あのややこの妹に、琴をひかせてやりたいのか。」

お父ウはふっとやさしい目もとなっていた。このわんぱくでも、そんなしおらしいことを